治療教育学研究　第6輯　1985

著しい甘えと攻撃性を示し、小犬に退行したある緘黙女児のplay therapy

神　野　秀　雄*

1　はじめに

筆者は，これまでの子どもを中心にした臨床経験のなかで，十数名の緘黙児の相談をうけてきた。来所した緘黙児の多くは，小学校高学年や中学生の年齢段階にあり，家庭外では，喋らなくても学校生活，社会生活をかなりスムーズに生きている印象をもっている。しかし少数の事例においては，学校適応がきわめて困難であった（神野1981）。また小学校高学年以上の緘黙児の play therapy を実施した著者のささやかな経験では，Client の personality change は，きわめて困難であり，therapy の展開がみられにくいことを感じてきている。セラピストとしての筆者の力量の問題も勿論あるが，一般的にいわれるように年齢が高くなればなるほど，心理治療の困難性が増大することは，なにも緘黙児に限ったことではないであろう。場面緘黙症の問題の性質上，幼稚園や保育園及び小学校入学後に，緘黙症状が明確に manifest されてくるが，治療機関や相談機関を訪れるのは，小学校中学年以上になる場合が多いようである（大井ら，1979）。筆者の経験においても小学校の上級学年で心理治療を実施し，緘黙症状が改善され，治ったという事例の経験をもっていないのである。

他方，情緒障害といわれるもう一つの代表的な，学界でも最も問題とされてきたいわゆる登校拒否児は，小学校高学年以上に発症する場合，確かに治療は困難となるが，緘黙症と比較すれば，再び登校し，一応治ったと考えられる水準にまで達する事例がはるかに多いことは，筆者の経験でもいえることである（神野1976）。このことは，一谷ら（1973）の緘黙症の形成要因に関する研究にみられるように，現在の段階においても登校拒否のようなかたちで，緘黙症の形成要因に関する仮説を提出することが難しいのであり，緘黙症の背景（心理機制）が非常に分かりにくく，了解しにくいことを意味しているのであり，心理治療の困難性と表裏一体の関係といえるであろう。

本報告では，数年前に play therapy を終結したある緘黙女児（インテイク時，5歳10カ月）の

*　障害児治療教育センター

play therapy プロセスを報告したいと思う。この報告を通して特に新たなノイエスを提出できるわけではないが，次のような理由で本事例をまとめてみようと思ったのである。①筆者は，十数例の緘黙児の相談にのってきたが， play therapy を実施し，一応の終結をみたのは，本事例が筆者の初めての体験であったこと。② play therapy の過程で本事例は，著しい甘え，非常に激しい攻撃性を示し，その意味について検討してみたいと思ったこと。③筆者自身のセラピストとしての在り方を一度検討してみようと思うようになったこと。以上の点が主要な理由であるが，本論文では緘黙児M子の play therapy の過程を詳述し，緘黙児の play therapy のプロセスをはじめとして心理治療の諸問題を検討していきたい。そして緘黙児M子を一層深く理解するとともに，今後の筆者自身の糧としていきたい。

2 事例 M子（女児）

(1) 来所経過

本児が愛知教育大学障害児治療教育センター（以下センターと記す）に母親と伴に来所したのは，昭和X年12月23日で，M子5歳10カ月の時であり幼稚園年長組であった。幼稚園側より，M子が園では，ほとんど喋らないことなど心配な点がいくつかあるので，本センターを紹介されたことが来所のきっかけであった。母親は，「家ではよく話してくれるし，今度担任の先生より，園の様子をきいてびっくりした。親戚へつれていくと，口数は少なくなるが，子ども同志だとよく喋っているみたい。」とインテイク面接（面接者は筆者）の時述べていた。

(2) 家族構成

家族構成は，父方の祖母（65歳），父，母，小2の姉及び本児である。

出産は安産で，体重は3,400 gであった。1歳の誕生前に喋り始め，歩くのも早かった。ひきつけなどの病歴は無し。幼い頃より大人しく，手がかからなかった。甘えたり，反抗したりすることがほとんどなく，むしろしっかりした子だと母親は思つていた。

(3) 母親から見たインテイク当時の本児に関する心配な点

①夜尿があり，夏頃はよかったが，寒くなった11月頃より毎晩ある。②指しゃぶりがあり，TVを見ているときは，ぬいぐるみ人形を抱いていつも指をしゃぶっている。③まだ赤ちゃん言葉があり，「お母さん」が「オカータン」になってしまう。④習字教室へ年中組の2学期頃より行っているが，最近行くのをしぶるようになった。⑤幼稚園は，休むことはないが，あまり行きたがらない。⑥幼稚園から帰ってくると，友達の家に遊びに行くこともあるが，あまり喋らないみたいだが，一緒に遊んでいる。⑦年長組の2学期頃より母親は，パートタイムの仕事に出るようになった。朝，登園する時は，幼稚園バスがくるところまで祖母が送っていっている。しかし本児は，母親にバスのところまで送っていってほしい素振りを示す。⑧左手の親指が奇形なので，幼稚園での体操や制作など他児と同じようにできるか心配である。以上がインテイク面接時，母親が述べたM子に関す

る心配な点，気になることがらであった。

(4) 幼稚園の担任から見た本児の状態像

①集団式知能検査ではＩＱ102。②幼稚園では，表情が固く，用便の時は小声で「オシッコ」と言いにくる。挨拶，返事は，とても小さな声でするが，しない時も多い。③グループ内での役割分担は理解できるが，友達の話をきいて笑うぐらいで，自分の意見をいうことはない。幼児語がみられ，他児からからかわれるのを恐れているようにもみえる。④鉄棒，雲梯，竹登りは普通以上にできる自信はあるが，縄飛びは，連続とびができず，１回ずつが精一杯の様子。⑤食が細く，好き嫌いはないが，食べるのに時間がかかる。⑥全般的にいって，何事につけてする事が遅いが，おおよそ園の動きには普通の子と同じようについていける。以上のような幼稚園での本児の様子について担任より報告を受けた。

3　M子のplay therapyのプロセス

Ｔｈ（セラピスト，以下Ｔｈと記す）は，筆者が担当した。約50分間を原則として play therapy の時間とした。そして play therapy 終了後母親との面接を20分～30分程度筆者が行った。その面接の間Ｃｌ（クライエント，以下Ｃｌと記す）は，面接室の外の廊下のソファに座って待たせた。トータル43回の play therapy の経過を各セッションごとに以下記述していく。また母親との面接の内容（主としてＭ子の家庭の様子・状態像）についても随時述べていき〔　〕内に付記する。

第１回（昭和Ｘ＋１年　１月13日）

Ｃｌは，ＰＲ（プレイルーム，以下ＰＲと記す）の入口から２～３歩入り，そこに立ったまま動こうとしない。（写真１参照）Ｃｌの両手は，後手で固く結ばれたままである。このポーズは，本当に rejective な印象を受けた。Ｔｈは　play therapy の一般的な instruction をＣｌに伝えたが，Ｃｌは動きそうにもない。Ｔｈは，Ｃｌから少し離れた所で見守ろうとするが、Ｔｈ自身どのように動いていいか見当もつかず落ち着かない。Ｃｌは後半，足の爪先で立ったり，少し身体を揺すったりする。視線は比較的よく動き，ＰＲ内を探策している印象であった。今回は，約40分で playを終了した。

〔わりと幼稚園のことを喋ってくれるようになった。幼稚園に行くと「お家へお口おいてきちゃう」とＭ子は母親に言ったという。〕

第２回（１月20日）

Ｃｌは，入口に立ったままである。ジャンパーのポケットに両手を入れ，じっと一点を見つめたり，ＰＲ内を見回したりしている。後半になると，ポケットに入れた両手で，ジャンパーのファスナーを動かし，カチカチと音をたてている。Ｔｈと視線が合うとサーと避ける。ほんの少し緊張がとれてきた感じで

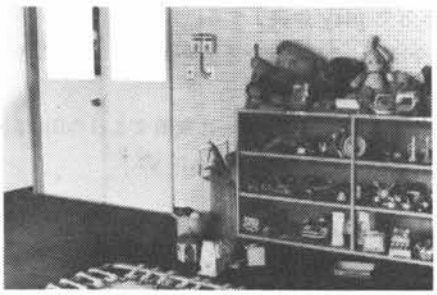

写真１　Ｃｌの立っていた入口とオモチャ棚

あった。

〔センターに来所することをM子は嫌がっている。来所前日より，とても負担になっているみたい。夜尿は3日に1度ぐらいになってきた。〕

第3回（1月27日）

次第に緊張はほぐれてきたが，Clは PRの入口に 立ったままである。ジャンパーに入った両手をよく動かしている。Thは，PRにあるプラレールで楕円形にレールを敷き，列車を走らせると，Clはそれを見ている。15分程たったところで，Clは2回ほど欠伸をする。その後，足を閉じたり，開いたりして初めて少し足を動かした。まもなく爪先で立って，2〜3歩あるく。すぐ再び最初のように少し足を開いた状態になる。Thは，Clのまねをして，爪先で歩いてみたが，「うまく歩けない」とClに言うと，初めてニコーと笑う。40分で終了する。

〔幼稚園では，生活発表会のための劇の練習があり，喋らないといけないので，昨日は，ひどく泣き，登園をしぶったので結局休んでしまった。「幼稚園には行かない。明日大学に行く」とM子は言ったという。強く母親に自己主張をし，登園を拒否したM子の在り方に， playの見通しとして何か明るいものをThは感じた。〕

（2月3日は，Clの風邪のため休み）

第4回（2月10日）

センターの玄関でClと母親に出会う。Clの表情は柔らかく，かなりリラックスしている印象をもった。PRまではスムーズに行くが，PRに入ると立ったままである。時々あくびをしている。Clは風邪ぎみで，よく咳をしている。Thが近づくと，視線をそらし身体は固そうである。Clから少し離れたところでClを見守る。

〔センターに来所することへのM子の抵抗は，柔らいできていると母親は語る。〕

第5回（2月17日）

センターの待合室は，PRの先にあり，いつもPRまでは，Th，Cl，母親の3人で行き，PRの入口で母親と別れるのであるが，今日のClは，玄関からPRに入るまで母親に向けてよく笑っている。しかしPRに入ると表情は，急に変って固くなる。Clは立ったままである。Thは，PRにあるぬいぐるみをいくつか持ってきて，Clの前に並べる。その中のモンチッチをとり出し，Clに働きかける。モンチッチの長い尻尾で，Clの顔や耳に触れたりすると，Clは，声は出さないが笑っている。必死に笑いをこらえている様子である。約35分で playは終了する。

今日は，Thがモンチッチを使って，かなり積極的に働きかけ，Clもそれに答えてくれた印象であった。

〔今までは，センターに来所する日の朝は，ぐずって起きてこなかったが，今日初めてスムーズに起きてくれた。〕

第6回（3月3日）

入口に立ったままのClに対し，前回と同じようにぬいぐるみでThは働きかける。しかし今日は，二番煎じ

ということもあってか，Clは，時々笑顔を見せる程度で，両手をポケットに入れたまま動こうとしない。30分で play を終了する。

〔今日は大学に来るのが苦痛みたいでM子は泣いていた。随分甘えん坊になったみたいだし，またすぐ泣くようになった。〕

第7回（3月10日）

入口に立っているClに対し，今日もモンチッチでThはかかわる。Clの表情はよく動く。後半に，ThがClをつれてTP（トランポリン，以下TPと記す。写真2参照）にのせる。そしてThは，Clの手をもって少しだけ飛ぶ。すぐClはやめる。ThがClの手をもったが，掌は，汗でびっしょりであった。Thは，あまり動かないClに対して，焦り，かなり強引にTPにのせてしまった。Thの未熟さではあるが，あらためてClの緊張の強さを実感した。

〔M子は，母親に「お母さん，大学にモンチッチあるよ」と言ったという。M子は，幼稚園から帰ってくると，ナオ子と名づけたスヌーピーのぬいぐるみのところへ最初に行き，「ただいま」と挨拶し，抱きかかえるという。寝る時も必ず一緒で，とても大切にしている。〕

第8回（3月25日）

Clは，幼稚園を卒園し，春休みになり，顔色もよく来所する。PRの入口に立ち，ポケットに両手を入れ，40分間すごす。Thは，Clの前にモンチッチ，キティちゃん，パンダ等をもってきて働きかける。特にモンチッチで働きかけた時のClの笑顔が印象的であった。

第9回（4月16日）

Clは，PRの入口でじっと立っている。Thは，ぬいぐるみを手渡そうとするが，Clの両手は，チョッキのポケットに入れられたままである。Thが，顔を隠しながらぬいぐるみのパンダで「イナイ，イナイバー」をすると，Clは，笑顔をみせる。Thがぬいぐるみを通してClに話しかけると，Thをじっと見つめ，小さく頷いたり，笑ったりする。Thが1人でTPにのり，とんでいると，Clは，Thの動きをよくみている。ThがTPの上で転んだりすると，よく笑っている。

〔M子は，小学校に入学し，スムーズに登校している。登校は，小4の姉と一緒に家を出ていく。夜尿は，入学したての頃は，毎晩あったが，少しずつ良くなってきている。4月15日から給食が始まり，「食べれた」と言って喜んで帰ってきた。〕

第10回（4月30日）

Clは，PRの入口に立っている。Thが，ぬいぐるみで働きかけると頷いたり，首を横に振ったりして反応する。Thは，ダンボール箱をClの近くにもってきて，電車ごっこのようなことを試みようとして，Clの肩にふれ，ダンボールに乗せようとする。しかし，Clは，断固として動こうとしない。Thが，Clの身体を抱いてダンボールにのせる。Clの身体は，きわめて緊張している。Thが，Clの乗った箱を引きずっていくと，中で立ったままの姿勢を崩そうとしない。まもなくThが，「降りて下さい」というと，自発的に降りる。Clの心身の緊張のすごさをThは，あらためて感じ，後半は，ほとんど働きかけることをしなかったし，またできなかった。

〔M子は最近登校するのを嫌がる。父親がランドセルを玄関の外に投げ出すと，泣きながら，しぶしぶ登校する。姉が病気で休むと，M子は，玄関でもじもじしており，一人では登校できないでいる。夜尿は少なくなり，本当に治ってきたみたい。〕

第11回（5月14日）

Clは，入口に立ったままである。プラレールのレールが，すでに楕円形に敷かれてあった。Thが，列車を3組走らせる。Clは，プラレールを見ている。Thが，意図的にぶつからせたりすると，笑って見ている。そのうちにClは，足でリズムをとり，時々両足を屈伸させ，身体を上下に動かしている。Cl自身，動きたそうであるが，動けないでいる。突然他のCl（男児）が，PRに入ってきた。Clは，体を緊張させ不安そうにしている。その男児が出ていくと，安心したようで，再び身体を上下させている。Thが，大きな熊のぬいぐるみをかかえ，熊の顔をClの鼻先に近づけると，声は出さないが，くすぐったそうに笑っている。まもなく大きな欠伸をする。Thは，モンチッチのぬいぐるみが，病気ということにして，お医者さんごっこを始める。Thは，長いブロックを体温計にみたてて熱を計る。「38度5分もある。Mちゃんはどうかな」とThがClの脇の下に体温計を入れる。Clは，じっと脇の下に体温計をはさんでいる。Thが，「あー，40度もある」といってClの額に手をあてると，嬉しそうに笑っている。

〔担任の先生が，家庭訪問で家に来た。学校では，他児に遅れないでついていっている。しかしまだ担任の先生とは，会話をしたことがない。給食は，少食で時間がかかるということであった。〕

第12回（5月28日）

いつも遊ぶモンチッチがなくて，Clを伴って他の3つのPRに捜しに行く。ThがClの肩に少し触れる程度で，Clは，素直に動いた。そしてモンチッチを見つけ，いつものPRに戻る。Thは，4つのモンチッチを，父，母，兄，姉の4人家族にみたてClに話しかけていく。時々声は出さないが笑っている。今日のClは，スカートの中に深く手を入れ，表情も固く，rejectiveな様子であった。

〔今日は，とても大学に来所する気持ちになれなかったようだ。家を出る時，非常に嫌がり，ベッドにしがみつき，離れようとしなかったが，無理につれてきたという。〕

第13回（6月4日）

Clは，今日初めて自分自身のぬいぐるみのモンチッチを2個もって来所する。左手に2つもって，右手をそえて玄関からPRに入る。モンチッチをもっていることもあって両手をポケットから出してPRまで行ったのは，初めてのことであった。Clは，入口に立ったままであるが，TPのところへ連れていこうとして，Thが，Clの背中をそっと押すと，TPまでスムーズに行く。Thは，PRにある大きなモンチッチを，2つもってきて「これは，お父さんとお母さんだよ」と言ってTPの上におく。Clに「モンチッチ，かして」というと，素直に渡たしてくれる。Clは，手があいてもスカートには入れない。Thは，Clの2つのモンチッチを子どもにみたて，お医者さんごっこを始める。Thはモンチッチの診察をする。「熱があるかな。体温計で熱を計ってみよう。薬を飲ませよう。」等言いながらやっていると，Clは，傍でじっと見ている。そのうちにCl自ら腰をおろして，立て膝になる。Thは，Clに「このモンチッチ熱があるから抱いてあげて」と渡すと，ちゃんと受けとり大事そうに抱いている。Thが，ふざけた遊びをすると，笑いを一生懸命こらえている感じである。モンチッチを媒介にしてCl自身初めて動くことができたセッションであり，play展開の上で，きれのよいところで終え，30分で終了した。

〔M子は　家を出る時「モンチッチもっていっていい」と母親にきくので，「いいよ」といったらスムーズに大学にこれた。この間父親に叱られ，玄関の外に出されてしまった。M子は，泣くこともなく，外でじっと座っていた。とても頑固な子だ。〕

第14回（6月11日）

Clは，スヌーピーのぬいぐるみ（ナオ子と名づけている）とウサギのぬいぐるみ（チー子）の2つをもって来所する。PRの中に入り，ThがClの背中に少しだけ触れると，TPのところまでThと一緒に歩いていく。Thは，2つのモンチッチをもってくる。Thが，「お買物ごっこしようか」と誘うと，Thの後から自然にオモチャ箱までついてくる。オモチャをとってClに渡すと，自然にうけとってくれる。いくつかのオモチャをTPの上まで2人で運ぶ。TPの上で，ぬいぐるみを使ったお買物ごっこをする。その後，お医者さんごっこに移る。また電話（モシモシ電話，ボタンを押すと「遊びに行こうよ」等の声のでる電話），スヌーピーやウサギのぬいぐるみを使って遊ぶ。いずれもThが，イニシアチブをとっているが，最後は，サッカーのような遊びになった。即ちClはウサギ，Thはスヌーピーの人形を持つ。2人は1mぐらい離れて，足を開いて床に腰をおろし向い合う。Thは，スヌーピーを手にもって，そのぬいぐるみが，ゴムボールを蹴る。ウサギをもったClは，転ってきたボールを，ウサギが蹴るような感じで蹴り返す。このボールのやりとりが，かなり続く。時々Thが，空ぶりをすると，小声を出しながら笑い転げている。このようなゲームになるとClは，まさに必死で闘かう感じである。

Thがイニシアチブをとりながらも，ぬいぐるみを媒介にして，Clは，本格的に動き出したといえる。

第15回（6月18日）

Clはスヌーピーをもって来所する。表情も柔らかい。Thは，モンチッチのぬいぐるみを1つもってくる。ThのモンチッチとClのスヌーピーのやりとりで play が展開していく。電話を使っても遊ぶ。モンチッチが，スヌーピーのところへ行き，ボールで前回のような遊びをしようと誘う。すぐに2人は，向い合って座りぬいぐるみをラケットのように使い，ボールのやりとりが始まる。失敗したら1点とられるというルールをThが作ると，Clは，勝とうとして一生懸命やる。15分程続けたところで，Thは，Clのもつスヌーピーに向かって，「ナオ子ちゃん，もっとやる。」ときくと，Clは，首を縦に振りゲームを続行することを表明する。30分以上続けて終了した。

今日は，ThがClの意志をきくと，Yes，Noは，首を縦に振ったり，横に振ったりして，明確に反応するようになった。

〔M子は，大学に来るのが楽しくなってきたようである。家では，姉がいることもあってか，甘えてこない。しかし大学に来所する時，バスを降りてセンターに着くまで，母親の腕にしがみつき，ベタベタしてくる。家では，指しゃぶりが多くなる。朝も登校前にランドセルをしょったまま寝ころがって，指しゃぶりをしている。授業参観があり，M子は，もじもじして落ち着かなかった。教室の壁には，良いことをすると○印をつけるグラフがはってあり，M子の欄にも人並に○印がついていた。〕

第16回（6月25日）

今日は，布製の手さげ袋にいつものスヌーピーの他に，もう1つスヌーピーのぬいぐるみを入れてもってくる。PRでは，中央にあるTPまでスムーズに，自発的にClは行く。Thは，Clが初めてもってきたスヌーピーをかしてもらい，「これ，ナオ子ちゃんのお母さん。」ときくと，Clは頷く。最初に電話で遊ぶ。Thのモンチッチが，Clのスヌーピーに電話をする。Cl自身は，喋らないが，そのかわりか，「もしもし電話」の

ボタンを自発的に押し，「もしもしおばあちゃんよ」という声が出るボタンを何度も押している。まもなくThの方から，サッカーしようと誘うと，Clは頷づき，前回のような遊びが始まる。しかし今日は，3回目ということもあってか，10分程でClは，飽きてきたようなので，テニスボールのかわりにバレーボールを使ってサッカーゲームを始める。Thは，ぬいぐるみを手にもっていては，とてもやりぬくいので，素手で始めると，Clもスヌーピーを傍らにおいてやりはじめる。2人とも，かなり勢いをつけてボールを転がす。まもなくThは，立ち上がり，Clもそれを見て立ち，バレーボールのキャッチボールのようになる。ThとClの間の距離もPRの端から端までの間隔になり，Thは，投げ方にいろいろvariationをつけながらClに投げる。これを20分以上続けて終了する。

第17回（7月2日）

Thが，2階の研究室から1階の玄関近くのClがいつも待っている所にいくと，Clと母親は，何か楽しそうに話をしている。しかしClは，Thをみるとすぐ黙ってしまう。Clは前回と同じようにスヌーピーを2つもって来所する。PRに入るとスムーズにTPまで歩く。そこでClの動きは，止まる。Thが，モンチッチをもってきて，スヌーピーに挨拶し，キスをすると，Clは，面白そうに笑っている。Thは，今日もバレーボールをもってきて，床の上を転がし合うゲームをするが，すぐにバレーボールでのキャッチボールに展開する。2人とも飽きてきたので，バレーボールでのボーリングに移る。次には，バスケットのシュート用の籠がありその籠をThが持ち，Clは，シュートを繰り返す。

イニシアチブは，Thがとるが，Clは，それにのって非常に活発に動くことができるようになってきた。

〔登校に関しては心配なく，朝も気嫌よく起きて出ていく。近所の人が，「最近Mちゃん変ったね。よく喋るようになったね。」と言ってくれる。大学に来るとすごく甘える。すぐ何か買って」という。playの終了時間にあわせて父親が迎えに来て，3人でレストランによったりすることが，楽しみみたい。毎日父親と風呂に一緒に入り，その日の学校の出来事を喋っている。しかし母親とは，あまり喋らない。〕

第18回（7月9日）

今日はスヌーピーを一つのみ持ってくる。Thは，モンチッチをもってきて，「こんにちは，チュー。」と挨拶をする。Thが電話をもってきて，Clと向かいあって座る。モンチッチが電話をかけると，Clは，受話機をスヌーピーの耳にあてる。「今から遊びに行くよ。」とThが言って，モンチッチが遊びに行く。「ボール遊びする。」という問いかけに，Clは頷く。そしていつものゲームが始まる。まもなくバレーボールでのキャチボールに移る。Thは，投げ方にvariationをつけ，両手での下手投げや，片手で受けとり片手で投げたりすると，ClもThのまねをして投げてくる。また失敗してボールを捨いに行き，そこから投げたりするので，PR中動いてのキャッチボールになる。Thが，わざとスヌーピーにぶつけたりすると，Clもモンチッチめがけて投げたりして，笑いながらやっている。しかし声は，出すまいとするので，「ヒッー」とひきつったような声になってしまう。Thは，フェイントをかけて投げたり，ワンバンドで投げたりすると，Clもまねて投げてくる。とても騒々しく，かつ愉快な雰囲気である。この後，バスケットボールに移る。まもなくTPを間にしてキャッチボールになる。Clはわざとへんな方向に投げたり，投げるふりをしてTPの上を転がしたりする。最後にThが，TPにClを誘うと，乗ってくる。2人で一緒にとぶ。ThがClの手をとり，「1，2，3」でもちあげると，嬉しそうに笑っている。45分間たっぷり動いて終了する。

第19回（7月23日）

Clは，ぬいぐるみを持ってこなかった。Thは戸惑い，いつものパターンでしか対応できなくて，モンチッ

チを1つClに渡してしまう。Clのモンチッチとthとのモンチッチとで挨拶をして，すぐキャッチボールが始まる。Clからの返球が，次第に速くなり，かつ乱暴になってくる。ボールを後ろにそらすと，捨いにいきながら，途中でオモチャを蹴とばしたりして，今までのClからは，想像もできないような動きがでてくる。Thが，いつも遊ぶバスケットの籠がなくて捜していると，Clは，ウロウロ歩きまわったり，球つきをしたりしている。Thがボールを投げると，Clは，げん骨でたたき返すなど荒っぽい行動が目立ってきた。Thが，突然TPをもち上げると，びっくりしたような笑いをみせ，Clもやってみようとする。そしてThが，TPをを押していき，Clは，TPとオモチャ棚の間に挟まってしまう。今度はClが押していき，Thは，TPと窓の間に挟まってしまう。次は，Thが押していく。このような交互の押し合いが，かなり続く。疲れてきたので，Thが，ロケットボール（大きいビニールのボール）をTPの上にのせると，Clは，それをワンバウンドさせたり，指1本でつついたり，頭で押したり，ロケットボールに息を強く吹きかけたりしている。

スヌーピーのぬいぐるみをもってこなかったClを，もっと大切にし，尊重しなければならなかったと反省した。ボールを通した遊びが，これまでかなり続いたが，ややマンネリ化し，Clは，飽きてきたようだ。TPが，ボールの次に重要な遊具になってきた。

〔学校で担任との懇談があり，学習面では，ついていけている。「先生，おしっこです。」と始めて，先生に言った。〕

第20回（8月6日）

スヌーピーをもって来所する。前回と同様にキャッチボールからTPの押し合いになる。そのうちダイレクトな2人のつつき合いが始まる。Clは，Thから逃れようとし，そのスリルを楽しんでいる様子。次にバットでのボールの打ち合いが始まる。2人が，2mほど距離をあけてバットをもって向かい合って座る。転ってきたボールをバットで打ち合うが，ThとClのまさに真剣勝負であった。しばらく続いた後，Thは，ボールのかわりにオモチャの自動車を出すと，その自動車をClは，思い切り打ち返す。面白くてしようがない感じであるが，笑いをこらえている。Thは，いろいろなオモチャを出してくるので，Clは，それが待ちどおしくてしょうがない感じである。Thが，オモチャを出すのが遅れると，Clは，バットで床をたたき催促する。時々意図的にか，大きな咳払いをする。Thが疲れて休んでいると，Clは，バットの先を自分の鼻に押しつけたりしている。Thが，「ブタになるぞ」と言って，ブーブーと鳴きまねをすると，Clも同じように「ブーブー」と鼻をならす。そしてThがClに近づくと，Clは，Thのバットを乱暴にたたきおとす。Thは，十手をもってきて「御用だ」というと，それもたたきおとす。まもなくチャンバラが始まる。Clは，全く真剣な表情で，思い切り刀を振り回しThに向かってくる。

今日は，咳払いしブタの鳴きまねをし，Clは，明確に，意図的に音声を出した。また行動も活発になり，Clのエネルギーが，猛烈に表出されるようになってきた。

（1カ月間夏休み）

第21回（9月3日）

スヌーピーとモンチッチをもって来所する。久しぶりの play で緊張ぎみの様子である。キャッチボールを始めると，意図的に咳払いをしたりして，次第に笑顔がみられ，しぐさが乱暴になってくる。Thが，空気の抜けたへこんだサッカーボールを，帽子のように頭にかぶると，Clは，面白くてたまらないといった様子である。TPの押し合いに移る。これらの遊びは，2人にとって新鮮味のないものになっていたので，Thは，前回（1カ月前）のように「野球やろうか」と言って，Clにバットを渡す。Thは，ボールのかわりにオモ

チャを出すと，Clは，待ってましたといわんばかりに打ち返す。そのうちThが，オモチャのかわりにClのもってきたスヌーピーを出すと，Clは，何のためらいもなく，大切にしている人形を打ち返す。Thが，「痛がっているよ」といっても，平気な顔をしている。Clの打ち返したオモチャが，Thの身体にあたり，Thが痛がっていると，Clは，「クッー，クッー」と声を出して笑っている。チャンバラが始まる。Clは，ものすごい勢いでThをたたきにくる。Clの真剣な表情と，そのエネルギーに圧倒されそうになりながらも，Thは真剣にたちむかう。10分間ほどで，猛烈な闘いは終了する。

〔夏休みに鳳来寺山に登り，頂上まで登りきり，それが大きな自信になったみたい。母に話しかけてくることが多くなり，また素直になってきたと母親はいう。〕

第22回（9月10日）

スヌーピーをもってくる。ロケットボールの蹴り合いをする。TPで，初めて10分間ぐらい2人でいっしょにとぶ。疲れて休憩をする。Thは，モンチッチをもってくる。そしてClのスヌーピーの傍におくと，Clはモンチッチをたたいたり，遠くへ投げとばしたりする。Thが，いろいろなぬいぐるみをもってくると，それを全部遠くへ投げてしまう。最後にTh自身がスヌーピーのそばにいくと，Clは，スヌーピーでThを力いっぱいたたいてくる。そのClの表情は，固く，険しそうであった。

〔M子は，外に遊びに行く時，今まではいつもスヌーピーをもって出かけていた。最近では，スヌーピーを家においておくようになった。〕

第23回（9月17日）

スヌーピーのぬいぐるみをもって来所する。PRに入るとThは，「今日は何しようかな，ボール遊びにしようか」等スヌーピーに話しかけるが，Clは，首を縦に振らない。Thは，少々困りながらもモンチッチをもってきて，スヌーピーに話しかける。そのうちにモンチッチがスヌーピーに触れたりすると，Clはスヌーピーでモンチッチをたたきにくる。そしてThがもっているモンチッチをたたきとばす。次にThが，大きなモンチッチをもってくると，Clは，力いっぱいスヌーピーでたたきとばす。Thは，PRにあるいろいろなぬいぐるみをもってくるが，Clは同様にたたきとばす。Th自身が，スヌーピーを摑もうとすると，Clは，スヌーピーでThを必死にたたきにくる。Thは，スヌーピーを摑んだが，スヌーピーのナオ子をたたきのめすには，今の段階では早すぎると感じ，Thは，敗けてしまう。Thは，再びぬいぐるみをもってきて，Clとのスヌーピーと闘いが続く。時々Clは，Cl自身の足でThのもつ人形を蹴りあげてきたり，噛んだり，毛をむしりとったり，激しい aggresive な行動を繰り返す。その勢いは，すさまじく，Thも応戦に必死である。Clは時々「ヒッヒッ，クックッ」といったような意地悪な笑い声も出す。30分以上闘いが続き，休憩となる。Clは，スヌーピーのぬいぐるみの衣服をきちんと着せたりしていた。

第24回（10月1日）

スヌーピーのぬいぐるみをもって来所する。PRに入ると，すぐClは，Thにスヌーピーを投げてくる。Thは受けとり，キャッチボールのように投げ返す。少しこの遊びが続くが，まもなくClは，スヌーピーの服を着せたり，脱がしたり，スヌーピーの頭の毛をむしり取ったり，噛んだりする。Thもまねをすると，Clは，Thをたたきにくる。まもなくClは，スヌーピーを放りなげ，ダイレクトにThの足や手をたたきにくる。Thも応戦する。エスカレートしてきてClは，スリッパを脱いで，それでThをたたきにくる。Thは，Clのもう1つのスリッパをとり，それで闘う。激しい戦いになり，もうまるで喧嘩のようになるが，結局Thは

PR内を逃げまわる格好になる。　play net（写真２参照）の中や下に逃げこんだりすると，深追いはしてこない。30分位闘いが続いた。

〔M子は，家では食欲もあり，沢山食べるが，学校では食べていないと担任より電話があった。最近母親がM子を叱ると，すぐ泣いてしまうとのことであった。〕

第25回（10月8日）

スヌーピーのぬいぐるみをもって来所する。PRに入るとClは，スヌーピーの頭を噛んだりして，Thの働きかけを誘っている感じである。Thもモンチッチをもってくると，スヌーピーとモンチッチの喧嘩のようになる。Clは，スヌーピーでモンチッチをたたいているうちにThをたたき始める。すぐスリッパを手にもちThを攻撃してくる。Thもたたかれまいとして逃げたり，反撃にでたり，前回同様の闘いになる。Thが逃げ，play net の下に行ったりすると，今日は追いかけてきて，エレクトーンをはさんで，にらみ合いの感じになる。Clは，威嚇するようにエレクトーンをスリッパでバンバンとたたく。Thに対して「ゴッホン」と咳をしたり，「ブー，ブー」と声を出したりもする。つぎに２人は，向かい合って腰をおろし，足で押し合いを始める。Clは，Thの足を蹴る。Thが先に蹴ると，Clは，立ちあがってThをたたき，ドンと座り足をなげ出し，「さあー，もう１回」といわんばかりである。ThがClの目の前に座ると，Clは，くるーと背をむけ，スヌーピーの服をいじっている。Thがのぞくと，Clは，そばにあるオモチャを手当り次第に投げつけてくる。Thが逃げると，近くまで行って容赦なくぶつけてくる。まもなくボール蹴りが始まる。Clは，あたりかまわず乱暴に蹴るので，そこら中のオモチャにあたる。Thもかなり激しく蹴り返す。次にPRの中央にボールを置き，両端からそれぞれ走ってきて蹴るゲームになる。Clは，ズルをして先に蹴ろうとする。蹴りそこなって転んだりすると，自分で笑っている。Thがスヌーピーにボールをあてたりすると，激しくThをたたきにくる。Time up。Clは，不満げに「ブツ，ブツ」と口を鳴らすが，「終わりにしよう」というと従う。

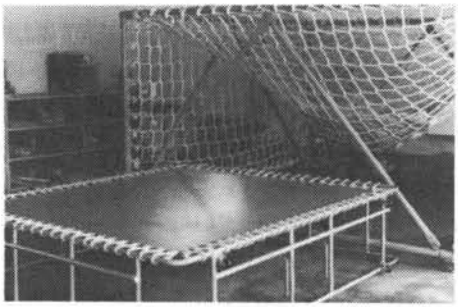

写真２　トランポリンとプレーネット

Clは，ときにはきわめて真剣に，時には笑いながらThを攻撃してくるが，前回までと比較して余裕がでてきたような感じである。

第26回（10月22日）

スヌーピーのぬいぐるみをもってくる。今日の前半は，前回の流れの続きのようで，さらにエスカレートしClは，Thに手をかえ品をかえ攻撃してくる。Clは，Thが逃げるので，PR中追いかけまわすことになる。20分ほど続く。まもなくTPでとぶ。２人でとびながら，つつき合いのようになる。ThがおりてもClは，１人でとび続ける。途中男児がPRに入ってくる。Clの動きは，ピタッと止まる。その男児が出ていくと，再びとび始める。時々腰を曲げ高くとんだり，脚を開閉させたり夢中でとんでいる。再びThも一緒にとぶが，Clの体力にはかなわず，降りてしまう。まもなくClもとぶのをやめる。Thが，「フー」と息を吹くと，Clは，同様に息を吹きかけてきたり，咳払いをしたりする。また２人でTPをとび始める。２人は，手にもっていたぬいぐるみをポイと捨て，手をつないでとぶ。Clは，本当に楽しそうにとんでいた。

〔大学に来るときは，甘えてもいいと決めているようで，非常に母親に甘えてくる。しかし家では，うって

かわって甘えてこない。〕

第27回（11月12日）

今日は姉も一緒に来所する。Clは，姉もいることもあってか，笑顔も非常に多く，随分気楽な感じである。今回は，いつものスヌーピーではなくて，Clが「サム子」と名づけた猿のぬいぐるみをもってくる。PRに入る。積木が散らかっているので，Thは，ダンボール箱に片づける。Thがふざけてサム子に積木をぶつけたりすると，Clは，積木をThにぶつけてくる。次第にエスカレートし，Thめがけて積木をいくつも激しくぶつけてくる。Thは，逃げまわる。TPの上に逃げ，Clを誘うと，すぐTPにのってくる。手をつないで一緒にとんだり，Thが，Clの足を踏み，Clは，踏まれまいとする遊びをしたりする。Thが疲れ，TPから降りると，Clは1人でとび始める。Thが，カウントすると，Clは，895までとび続けたところで，他児が入ってきたため，とぶのをやめてしまう。他児は，すぐ出ていく。ThもTPに乗り，一緒にとぶ。Thが，「1，2，3」と言って，2人でタイミングを合わせて高くとんだりする。Clからは，「ヒッ」というような笑い声がもれる。時々Clは，Thにぶつかったり，Thの足をけとばしたりする。Clは，TPの角に足をあやまってつっこんでしまう。Thが，「大丈夫か」というと，Clは，ニコーと笑ってすぐ立ち上がる。

aggressive な行動は，時々みられるが，随分減少してきている。Clは，何か安心してTPを楽しんでいる感じである。

第28回（11月26日）

猿のぬいぐるみを大事そうに抱いて来所する。PRに入るとThは，そのぬいぐるみの名前を忘れてしまいClにきく。いろいろ名前を思い出していうが，全て間違っており，Clは，首を縦に振らない。猿のぬいぐるみのよだれかけに名前が刺繍してあるのに気づき，それを見ようとするが，Clは，隠して見せてくれない。Thは，何とかみようとして工夫してのぞくと，やっと「サ」の字のみみえる。「あー，サムちゃんだ」といってもClは，首を横に振るのみである。その時は結局分からずじまいであった。まもなくThとClは，TPに行き，Thがモンチッチを捨てると，Clもサム子をポイと放りなげる。そうするとThもClも，何か自由に動けるようになる。TPでは，2人で一緒にとんだり，縄飛びのまねをして，2重飛び，3重飛びをしたり，Cl 1人でとんだりして，全く自由に動いている。Thが疲れて，TPから降りると，Clは「ウー」と声を出し，Thに息を吹きかけてくる。ThもClに息を吹きつける。何回となく息を吹きかけ合いを繰り返す。またTPにいるClと，TPから降りたThが，手で引っぱり合いをする。Thがやめると，Clの方から手を出し誘いかけてくる。

〔今日M子は，大学に来る途中でサム子を忘れたのに気づく。家に電話して祖母にサム子を持ってくるように頼み，駅までもってきてもらった。〕

第29回（12月10日）

サム子を持って来所する。Thがモンチッチを持ってきて，サム子とのたたき合いになるが，以前のようにエスカレートすることもない。Clは，なんとなく「つまんないな」という表情である。Clは，オモチャ棚のピアノをたたいたり，ポンキッキ時計のボタンを押したりしている。まもなくClは，TPの上で仰向けになる。ThもClの横に仰向けになる。Thは，モンチッチを捨てると，Clもサム子をポイと捨てる。これで2人は自由になり，ThとClの2人の世界という感じになる。TPでは，2人でタイミングを合わせて高くとんだり，つつき合ったりする。まもなくTPの隣にある play net に登る。Thは，中央に座ると，Clは端の方に座る。しばらく息の吹き合いになる。Thが，Clの足をひっぱったり，中央で足の蹴り合いをするが，そ

の遊びは，何となくイチャイチャした遊びである。じゃんけんをして勝つと相手の頬をつねる遊びをする（ジャンケンブルドック）。Thが敗けるとClは，Thの頬をつねる。Clが敗けると，Clは，つねられまいとして逃げたりする。

Clは，ぬいぐるみを捨てると本当に自由に動いている。息を盛んに吹きかけてきたり，誘うようなまなざしも多く，なんとなく妖精を連想させる。

第30回（12月17日）

サム子をもって来所する。モンチッチとサム子でしばらくたたき合いをし，まもなくTP，play net に移り，前回のような遊びになる。元気にはねまわることはなくなり，それとなくThに甘えたり，ねだったりする素振りが多くなる。

〔授業参観があった。1人ずつあたっていき，M子の場合どうかなと心配であったが，かろうじて人並に言えた。「声が小さいから，もっと大きな声で」と注意されていた。自ら手をあげることはないが，呼ばれれば返事をする。M子は，母親に「お母さん，学校に行くとね，夏休みと冬休み以外は，お口がお休みになるの。家にいると休みじゃない。」と言ったという。大学に来所する時は，母親が学校まで迎えに行っていたが，最近は，「もう迎えに来なくていいからね。」と言うので，母親は，家でM子の帰りを待ち，それから大学にくるようになった。母親は，M子に「大学で先生とどんなこととして遊んだ。」ときくとM子は，「2人の秘密」と言って，絶対に教えてくれない。最近は，3人組といって友達2人とよく遊んでいる。〕

（1カ月間の冬休み）

第31回（昭和X＋2年　1月21日）

サム子をもって来所する。母親とClは，PRの入口のところで待っていた。久しぶりのこともあって入口で待つClの表情は，固い。PRに入るとClは，入口のところで立っている。Thは，モンチッチをもってClに近づき，「あけましておめでとう」と挨拶し，モンチッチをサム子に押しつける。ThもClも，人形をお腹のあたりにもって押し合いのようになる。相撲の押し合いのようになり，押したり，押されたりが続く。そのうちThが，Clのサム子をとろうとするが，Clにかわされてとれない。Th自身のモンチッチを，ふざけてポイと放ったりすると，Clは，かなりはっきり声を出して笑う。まもなくTPにのり，2人でとぶ。すぐClもサム子を放りなげる。Thが，「1，2，3」と言ってタイミングを合わせてとぶが，そのうちにClは，わざととぶまいとしたりしてThにかかわってくる。あるいは，じっとTPに立ち，Thと一緒に絶対とぶものかといった具合である。次にTPの上で足相撲のようになり，足でつつき合になる。Thが，強く押したりすると，Thの足をClは，たたきにくる。そんな時，Thは，屁をしてしまった。Clも声を出して笑っている。Thが「何の音」というと，Clは，ケタケタ笑っている。まもなく2人は，play net に登る。中にロケットボールがあり，ThがClにぶつけたりすると，Clは，それをよけて逆にThにぶつけてくる。このやりとりがかなり続く。Clのみ play net から降りて，play net の下に入りこみ，下から中にいるThの足を引っぱったり，Thが手を出すと，Thの手をたたきにくる。Clが執拗に攻めてくるのでThは，オオカミのような格好をして「ウォー」と吠えると，Clは，「キャン」と鳴く。全く予期せぬ反応でThは，驚いてしまった。スピッツそっくりの鳴き声であった。Th「ウォー」，Cl「キャン」の繰り返しで，動物のような感じでの communication を5分ほど続ける。キャン，キャンとうるさいのでThが耳を押さえたりすると，Clは，それが面白いようで一層強く鳴いたりする。

〔最近小犬を飼うようになり，名前をゴンタとつけたそうである。M子は，その犬を大学につれてきてＴｈに見せたかっだそうである。〕

第32回（1月28日）

スヌーピーとサム子の２つのぬいぐるみをもって来所する。前半は，前回と同様でＴＰの上でのふざけあい的 play である。後半ＴＰの上でＴｈが，play net の鉄柱に手を触れていると，Ｃｌは，その手をたたきにくる。Ｔｈは，Ｃｌがたたく瞬間に鉄柱から手を離すので，Ｃｌは，鉄柱をたたいてしまう。Ｃｌは，何とかＴｈの手をたたこうとしてフエイントをかけたりして工夫している。かなりふざけ的な遊びである。またＴｈがスヌーピーの名前を忘れてしまい，いろいろ名前をいうが，Ｃｌは，首を縦に振らない。Ｔｈがいいあてるまで Ｃｌは楽しんでいる。Ｃｌは，前半に犬の鳴き声を少しする。

第33回（2月4日）

サム子を持って来所する。ＴＰ，play net の中でのジャンケンブルドック，Ｔｈが play net の中で，Ｃｌが play net の下に来てのつつき合い等の play であった。今日Ｃｌは，犬の鳴きまねを頻繁にする。

第34回（2月18日）

スヌーピーをもってくる。ＴＰと play net を中心とした play である。最後の方でＴｈが，Ｃｌのお腹に足をつけて，飛行機のようにクルクルまわす。Ｃｌは，風邪をひいており，30分位で play は終了する。少しだけＣｌは，犬の鳴き声をするが，風邪をひいたスピッツという感じであった。

第35回（3月11日）

スヌーピーをもってくる。play 開始後15分位たったところで，ＴｈがＴＰの上で「ワン」というと，Ｃｌは「キャン，キャン」鳴き始める。Ｃｌは，まさに犬のように両手をＴＰにつき，増々強く吠える。Ｔｈも「ワン，ワン」と繰り返す。まもなくＣｌは，頭をＴＰにつけて，両手で顔を隠し，キャン，キャン吠えている。まさに小犬が親犬に甘えている感じであった。

〔最近，学校から帰るとすぐこたつに入り，母親をよび，ＴＶのチャンネルかえろとか，いろいろ要求してくる。母親が従わないと涙をだして泣く。また２階にあがってしまい，食事も２階までもってこいと要求してくる。このことが２〜３日続いており，このままにしておいていいか困っている。〕

第36回（3月25日）

ペイ君と名づけた新しいぬいぐるみとスヌーピーの２つをもって来所する。母親によると，１年間休まず登校した褒美として父親にペイ君を買ってもらった。それをＴｈに見せたくてもってきたのである。

ＰＲにいつものモンチッチがなくて，犬の大きなぬいぐるみでＣｌのもつ２つのぬいぐるみに挨拶をする。少しぬいぐるみどうしでつつき合いをする。Ｃｌは，ＴＰに仰向けに寝るので，Ｔｈは，ＴＰにあがりとび始める。Ｃｌは，急にスヌーピーを放りなげ，新しいペイ君をもってＴｈと手をつないで飛ぶ。Ｔｈが足でＣｌの足を払い，転ばそうとする。Ｃｌは，タイミングよく高くとび，やられまいと一生懸命とんでいる。そのうちにＴｈに足払いされ，転んでしまう。Ｔｈは，Ｃｌの両手をもって，Ｔｈの頭でＣｌの胸のあたりを押すと，くすぐったくてしょうがないようで，とても楽しそうに笑っている。またＣｌは，自ら手を play net の鉄柱のところへもっていき，Ｔｈの働きかけを誘っている。Ｔｈが，Ｃｌの手をたたきにいこうとすると，サーと手を引っこめる。次にＴｈが鉄柱に手をつけると，今度は，Ｃｌがたたきにくるが，ルールを破りＴｈの手をたたかずに，

Thの身体をたたいたりする。まもなく2人は，TPの上で足を出して向い合って座り，足相撲をする。時々Clの足が，Thの股間に当る。Thが「H」と言うと，Clは笑いこけている。2人は，4つんばいの格好になり，頭と胴をくっつけ，押し合いになる。Thが「ワン，ワン」，Clが「キャン，キャン」と繰り返し吠え合う。さらにClは，4つんばいのThの下に入ってきて，じっとしながらも「キャン，キャン」鳴き続ける。子犬が親犬にすっかり甘えている感じである。またロケットボールの上でThが寝たふりをすると，Clは，ペイ君でThの頭や身体をポンポンたたいたりして，盛んにちょっかいをかけてくる。

〔母親は，M子のために2階まで食事を運んだが，これではいけないと思い，1度強く叱った。それ以来無理な要求はしなくなった。最近M子は，随分明るくなった。疲れた表情も示さない。母親も「最近になって，やっとM子の気持ちが分かるようになったみたい。」と言う。〕

（1カ月間の春休み）
（4月以降は，2週間に1回のペースで play therapy を実施する）

第37回（5月6日）

スヌーピーをもってくる。Thは，モンチッチをもって挨拶する。今日は，ぬいぐるみどうしのつつき合いから，次第にエスカレートし，たたきあいになり，さらにThの身体までたたきにくる。TP，play net は，いつもの感じの遊びである。play net の下では，Clは，「キャン，キャン」と鳴き始め，Thも「ワン，ワン」で応対する。Thが，大声で吠えると，ClもTh以上の大声で「キャン，キャン」と鳴き続ける。Thが馬になり（馬というより親犬であろう），背中にClが乗ってくる。Thが，Clを振り落とすと，Clは，ひどく怒って，激しくThをたたきにくる。Clは，振り落とされると，本当に険しい表情となる。Clは，あたかも女王様になったような感じで，Thは，下撲のような雰囲気である。Clの真実の aggression が表出された印象であった。

第38回（5月20日）

スヌーピーをもってくる。TP，ジャンケン・ブルドッグをする。Clが，じゃんけんで敗けても，ルールとは関係なくThを思い切り強くたたきにくる。Thが，あまりの痛さに「カー」となって，1回たたき返すとClは，2〜3回たたきにくる。Clは，play net の鉄柱で逆上りをする。Thも続けてする。次にスヌーピーもする。この順番で10回ほど繰り返す。そのうちにThだけ逆上りをしろとClは態度で要求してくる。「何回するの」ときくと，Clは，何もいわない。Thが両手を開げて10回というと，頷く。疲れて10回もできないから，まけてくれとThが言う。Clは，両手を開いて10回やれと主張する。そのうちに何とか9回にしてくれて，さらに8回，7回……とうとう2回までにしてくれた。何となくイチャイチャした感じのやりとりであった。

〔遠足の時，何かのひょうしにM子は，大声をあげ，まわりの子供も驚いたが，M子自身も驚いたという。算数の引き算が分からないみたいで，学校に行きたがらない。母親が，「それじゃ教えてあげる。」というと素直に教えてもらう。昨年ならば，M子の間違ったところを指摘すると怒ってしまい，母親のいうことを少しもきかなかった。〕

第39回（6月2日）

洗って白くきれいになったスヌーピーをもって来所する。PRに入るとThのモンチッチと挨拶。すぐたた

き合いになる。Thも適当にClをたたくと，Clは，2倍，3倍となってたたき返してくる。そのうちにClは，TPに仰向けになる。ThもTPにのり，とび始めると，Clは，すぐ立ち上がり，一緒にとぶ。Thが，モンチッチを放りなげると，Clも少し遅れてスヌーピーを投げる。Thが足払いすると，Clは，タイミングよくかわす。Clは，よくThの胸のあたりをげんこつでパンチしてくる。Thが少し攻撃すると，2〜3回激しいパンチのお返しがくる。ThがたたくとClは，「キャン，キャン」と鳴き，嘘泣きをしてTPの上に伏せる。Thが「ごめんね」というと，顔を上げて笑っている。Thの方が，TPに伏せて嘘泣きをすると，ClはThの背中にのり，馬のりのような格好になる。背中の上でClは，ピョンピョンはねる。Thが，Clの足の裏をくすぐると，嬉しそうに笑っている。その笑い声は，まさに真実という感じであった。

Cl自身をよく表出したと思う。泣く，すねる，甘える，強烈なパンチ，犬の泣き声，笑い声，息を強く吹きかけるなど様々な感情を表出したが，しかし時々無表情な，固い感じも顔に出す。

第40回（6月24日）

playは，ますますaggressiveなClの行動が目立ってきた。Thが少しClにちょかいをかけると，Clは，力いっぱいThにパンチしてくる。いわば，それの繰り返しが続く。今日のClは，爪が長く，ThがClの手をとると，爪を立ててThの手を握ってくる。Thが痛がると，それが面白いようで，何度も手を握ろうとしてくる。TPの上でClは，仰向けになる。Thもそばで同じ格好をする。Clの方からThに近づき，Clは足でThの足を蹴ってくる。Thも反撃するとClは，手や足でThの背中を思い切りたたいてくる。Clは，activeにThに接近してくる。Thが少しかかわると，Clは，たたく，パンチ，足蹴りで反応してくる。Thが，あまりの痛さのためにClにたたき返すと，今度は，怒って，頬をプーとふくらませ，Thをじっと睨みつけてくる。またTPの上で伏せて泣くまねをしたりする。犬の鳴き声は，ほとんど消失した。最後に，Thが声を出さずに口形のみで「おわり」と大きく口を開いていう。それを数回して，Clの耳もとで「おわり」というと，Clは，「ウン」と小声でかすかに言う。

〔授業参観があって出かけていった。M子は，母親をみて「ニコー」と笑ってくれた。とても余裕のある感じで，緊張している様子もなく，1年生の時とは比べようのないぐらい良くなった。家で母親と一緒に遊んでいる時，ふざけて犬の鳴きまねをして「キャン，キャン」ということもある。

第41回（7月15日）

Thは，今日も全く疲れてしまった。Clの今日の感情表出も，全くフィルターなしで，自由に出しきっている感じである。特に笑い声がよく出て，本当に自然な笑いである。また笑ったかと思うと泣いたり，ブタの鳴き声のまねをしたり，息を何度も吹きかけて見たりする。Clは，自分自身の指で鼻と目を引っぱりあげ，面白い顔をつくり，Thを面白がらせたりもする。ThがClに少し触れたりすると，強烈なパンチでThを，たたきにくる。Thは，いつもながら，痛いのに耐え，逃げまわっている。playが終ると，Thの背中はClのパンチのため赤くなっている。

第42回（7月29日）

前回ほどの激しいClのパンチはなかった。今日の中心的playは，TPの上での次のような遊びである。Clが，口を開き，口形のみで「サムコ」という。それでもThは分からないので，Clは，かすかな声で「サムコ」と言う。それでThは，やっとわかる。それからClは，「マッチ」「ホリチエミ」「マツモトイヨ」「シブガキタイ」等の問題を出してくる。繰り返し，繰り返し，Thとのやりとりを楽しむ。Thが，「シブガキタベル」と言うとClは，大声を出して笑っている。また「シブガキタイ，そんな歌手いないよ」というと，

Clは怒って，3〜4発Thにパンチをくらわす。歌手の名前は，小声であったが明瞭にききとることができた。

（夏　休　み）

第43回（10月28日）最終回

9月に来所予定であったが，母親によるとClは，「私，治ったもん。」と言って大学に行こうとしなかったので，連れてこれなかった。今日は，最後ということでClも納得して来所したということである。

今日は，ウサギのぬいぐるみをもってくる。新しいぬいぐるみである。ウサギとモンチッチの挨拶をして，すぐTPに行く。TPの上で仰向けになる。Thのぬいぐるみをとり，強くTPにたたきつけたりする。すぐTPからClは，降りてしまう。そして play net の下に行き，小児用の音の出る椅子に座る。ブーブーと音がする。まもなくホワイト・ボードのところに行き，ペンで字をかく。Thもウサギの顔をかいたり，へんな顔を書くとClはそれを消しにくる。Clは，自発的に「バカ，ばか，ブタ，ぶた」と沢山書く。Thが，「Mちゃんのバカ」とかくと，怒ってThの掌にペンで色をつける。そのようなやりとりをしているうちに，Thの両方の掌は，ペンで真黒になってしまう。丁度50分で終了する。

Clは，本当に楽な感じで動いていた。TPから降りるということによってClは，これから自分1人で生きていく象徴のようにも思われた。

4　考　　察

(1)　play therapy のプロセス

43回にわたる play therapy の経過を述べてきたが，Clの動きに視点を合わせれば，おおよそ次のように区分できるであろう。

Ⅰ期　（第 1回〜第12回）　硬　直　期
Ⅱ期　（第13回〜第19回）　活　動　期
Ⅲ期　（第20回〜第25回）　攻　撃　期
Ⅳ期　（第26回〜第30回）　甘　え　期
Ⅴ期　（第31回〜第36回）　退　行　期
Ⅵ期　（第37回〜第43回）　甘え、攻撃を中心とした多様な生々しい感情の表出期・開口期

このように期に区分してみると，緘黙児の play therapy のプロセスとして従来からいわれてきているプロセスと変わりはないが，筆者にとっては，特にⅤ期，Ⅵ期といった子どもの深い層から表出された感情を受容し対決する体験を得たことは，貴重な経験であった。

心因性緘黙症児の心理治療仮説として畠瀬（1978）は，次のように述べている。①生体レベルでの緊張の緩和。② positive regardの独占体験の必要性。③緘黙症児は，自己の存在を享受するという人間が生きる心理的基底のところで傷ついている。深い心理的次元での傷と，表現をめぐる外傷体験が相乗して緘黙を形成すると考えられる。表現する喜びを治療関係の中で獲得し，外傷体験を克服することが緘黙完治の条件である。④緘黙症児の否定的側面が十分に受容され，出しつくされることが，彼らの心理的成長を進める。以上のように述べているが，M子の play therapy を

実施した筆者にも，畠瀬と全く同様に感じられるのである。特にC1がnegative feelingを表出し，Thが十分に受容することが，緘黙児の play therapy にとって決定的に重要な体験のように思われた。M子の場合，Ⅲ期で刀やスリッパでThを激しく叩きにきた。V期で退行し，Ⅵ期に入るとaggressionは，生々しく，ストレートなC1の感情であり，何の加工も防衛もない，火山のマグマを連想させるaggressionであった。Ⅵ期においてC1の否定的側面が十分出しつくされたといっても過言ではないように思われた。なおaggressionの表出は，甘えの表出と表裏一体の関係にありこの点については後に考察してみたい。

⑵ 「ぬいぐるみ」の意味

M子とのplay therapyを進めるにあたって，きわめて重要な役割を担ったのは，いうまでもなく「ぬいぐるみ」であろう。Ⅰ期のC1は，PRの入口に立ったままであり，両手は背後で結んだり，ジャンパーに入れたままで，play状況に対して非常にrejectiveであった。Thにとって最も困惑し，戸惑いの時期でもあった。第5回よりThは，モンチッチのぬいぐるみを通して，C1との communication を求め始めた。C1は，少しずつリラックスし，柔らいできた。第13回にC1は，家からモンチッチをもって来所し，第14回には，C1の最愛のナオ子と名づけた，スヌーピーのぬいぐるみをもってくる。Ⅱ，Ⅲ期では，スヌーピーが最も多かったが，時にはモンチッチであったり，2つのぬいぐるみをもってきたりした。Ⅳ期に入ると，サム子と名づけた猿のぬいぐるみを持って来所する。V，Ⅵ期では，1度だけペイ君と名づけたぬいぐるみをもってきたがほとんどスヌーピーであった。最終回は，新しいウサギのぬいぐるみであった。play therapyの経過で述べたように，ぬいぐるみがThにとってC1へのかかわりの唯一の窓口であった。C1もそれに答えてくれたのであろう。第13回よりぬいぐるみをもってきてcommunicationを始めたのである。Ⅱ期では，ThとC1との関係というより，ThのモンチッチとC1のスヌーピーとのかかわり合いといった方がベターかもしれない。Ⅲ～V期では，play therapyの開始10分間ぐらいで，ぬいぐるみを捨てるとC1は自由になり，Thとのダイレクトなかかわり合いができたのである。M子との play therapy のプロセスは，①全く何も表現しない時期，②ぬいぐるみを通して自己を表現するようになった時期，③自分自身をストレートに表現するようになった時期，と区分することもできるであろう。Ⅵ期の第41回と第42回は，C1がぬいぐるみをもって来所したかどうか，カルテに記載されていないし，Thの記憶もはっきりしない。この時期は，ThにとってもC1にとってもぬいぐるみは気にならなかったのであり，あっても，なくてもよかったのであろう。

ところでぬいぐるみのスヌーピーのナオ子は，単なるcommunication手段としての媒介物という捉え方だけでは不十分であろう。Winnicott（1953）のいう移行対象としての意味を，担っており，母子関係の観点から更に検討しなければならないであろう。それにしても「ぬいぐるみ」のもつ重要な意味をあらためて考えさせてくれたM子であった。

(3) トランポリンの意味

M子との play therapy を経験するなかで，play room のほぼ中央に位置するTP（トランポリン）が，重要な役割を担ってくれたように思われる。第19回ではTPの押し合いをした。TPは，とんで遊ぶものだと決めこんでいたThにとって，TPの押し合いは，驚きであり，新鮮な遊びであった。第22回に初めてC1はTPをとぶ。Ⅳ期に入ってからTPが，play therapy の重要なホームベースとなり，TPという場でThとC1との様々な経験がなされたのであった。PRすべてがplay therapyの場であるが，C1にとって最もsecurityの得られる場がTPであった。TPは，いわば舞台であり，その舞台の上でThとC1は，様々なドラマを演じたといえるであろう。Ⅳ，Ⅴ，Ⅵ期という最も重要な時期にTPがなかったならば，このように展開していかなかったかもしれない。C1は，他の遊具あるいは，場を求めたかもしれないが，M子とのplay therapyを通して，場あるいは遊具のもつ意味が，C1 1人1人異なっており，ホーム・ベースあるいは舞台となる領域を，Thが十分認識することの重要性を教えられた思いがする。

(4) 開口現象（音声言語）について

M子は最後までPRで気楽に喋ることはなかった。しかし play therapy の経過を見て分かるように，非言語的な，口を開いたcommunicationは多くみられた。Ⅳ期の甘えの期に入ると，息をThによく吹きかけてくる。またブタの鳴きまねもみられた。そして最大なポイントは，犬の鳴き声であろう。第31回にThが，「ウォー」と吠えたのに反応してC1は，「キャン，キャン」と鳴き始めたのであった。何故Thが吠えたのか，とても不思議に思えたが，この点はともかく，第37回頃までC1は，時には犬になりきり，女王様のような犬，強い犬，弱い犬，赤ちゃんのような犬，様々な犬になってC1は退行したように思われた。Thも同時に親犬になったり，下僕になったりしして「退行」した。このような体験の後，Ⅵ期に入りC1の生々しい，未分化な感情が表出してきたといえる。そして第42回では，口形で相手の名前をあてる遊びが出現し，小声で名前をいったりもした。最終回では，ホワイト・ボードに文字をかき，終了した。畠瀬も述べているように「退行現象から開口へ」というプロセスは，筆者も同感であるが，M子は，自由に喋るというまでにはいかなかった。 play therapy においてM子の退行，aggressionが不十分であったかもしれないが，このあたりが筆者のセラピストとしての力量の限界であり，C1自身もそれを感じ，「私，治ったもん」と母親に告げ，終了宣言をしたのかもしれない。とにかくThとM子との人格のぶつかり合いで，M子は，やるべき作業は終えたのだろうと思う。

play therapyの効果は，C1の現実場面での行動によって評価されるべきであろう。その意味で母親との面接を通して，家庭や学校での状態について情報を得てきた。play therapy の経過で述べてきたように，特に学校場面での緘黙傾向は，非常に改善されてきていることは明らかであろう。

⑤ 甘えと攻撃性について

M子とのplayにおいて最初に表出した明確な感情は，攻撃性であり，次に甘えに移り，退行期に入り，最後は，甘えと攻撃性が錯綜した生々しい感情であった。playの展開にともなってⅠ期の頃のM子の状態からは，およそ予想もできないほどの感情の表出が見られ，M子のエネルギーの凄まじさに驚かされるのである。弘中（1983）は，緘黙症児を「萎縮した自我と肥大した自我」と捉え，この自我の分裂・錯綜状態のために適切な対人関係がとれないとしている。この視点にたてばM子の現実場面の萎縮した自我とplayの後半（Ⅲ期以降）の肥大した自我の統合が課題といえるであろう。M子は,play therapyの体験の中で，甘えと攻撃性を十分に出しつくすことによって自我の統合に向けてかなり歩んできたと考えられる。荒木（1979）も緘黙症の分類に甘えと攻撃性を重要な指標としているが，自我の中核的問題は，この甘えと攻撃性の問題として捉えることができるであろう。甘えと攻撃性は,play therapyのプロセスに示されたように，まさに表裏一体の関係であり，M子のような緘黙児に限らず，子どもの心理治療に共通する根本的問題と思われる。それにしても，緘黙症の甘えと攻撃性の強さは，想像を絶する凄まじさを感ずるのである。

M子の甘えと攻撃性を考察するにあたって，家族の問題について言及する必要があろう。父親はM子と風呂に一緒に入ったり，playの終了に合わせて大学に迎えにきたりしてM子を可愛いがり，M子の来所についても非常に協力的である。playの展開にともない風呂でのリラックスした父子のかかわり合いを母親は報告している。母親は，上品で優しい印象であり，M子に接する態度も穏やかであるが，逆にあまりにも落ち着いてみえ，心の様々なconflictをきわめて抑制しているように思われる。母親との面接においても，時々みせる母親の無表情な固い顔が，Ⅰ期の萎縮し緊張したM子の表情と重なり最後まで気になった。この母親のもとでM子は，甘えたり泣いたりしない手のかからない，むしろしっかりした良い子とみられて育った。M子が，母親に甘えるようになったのは，大学に来所するようになり，その往復のバスや電車の中が初めてであった。治療終結の時点においても，家庭では十分甘えることができないでいる。M子は，幼児期より指しゃぶり，夜尿，幼児語，動物のぬいぐるみを可愛がる等に示される情緒障害的サインを表わしていた。ぬいぐるみへの固執は，まさに母親への甘えの代償行為といえるであろう。また次のようなエピソードもあった。M子が学校の宿題で，自分の小さい頃の話を母親から聞いてきなさいという課題があった。M子は母親に「小さい時，どんなことしてた。」ときくと母親は，「一緒に遊んでいたでしょう。」と言うと，M子は，「私，一人でTV見てた。」と言いはるという。母親は，「小さい頃から，目が届いていなかったのかしら。」と反省していたが，M子自身の母親の捉え方は，このエピソードが端的に示しているのであろう。

人間は，成人に達するまで依存様式は異なるが，両親に甘え，依存した存在である。そして経済的に独立し，結婚した後も，様々な様式で依存し続けるのである。従って甘え・依存は，健康な人格発達にとって必要な役割を果しているのであろう。出生し身体的に母親から分離するが，精神的に分離独立していく初期である乳・幼児期の親子関係のなかで，甘え・依存がどのような過程を経ていけば，精神的に健康な人格につながっていくのであろうか。土居によれば，「甘えとは，乳児

の精神がある程度発達して，母親と自分とは別の存在であることを知覚した後に，その母親を求めることを指した言葉である。従って甘えとは，母子分離を前提としながら，それを解消しようとして依存する状態を指す。」また，「甘えるのは，主客分離という傷を癒そうとするのだ。主客分離を解消させることは，実際は不可能である。甘えは，主客分離を一時忘れさせるかもしれないが，決してこれを解消しない。」等述べている（熊倉ら，1984）。このように甘えは，主客合一，主客分離の葛藤を意味しているのであり，甘えは，主客合一の一時的な幻想にひたることである。M子は，何らかの理由で母親に甘えることができなかったが，その反作用として対象へ，激しい攻撃性が向けられるのも当然であろう。M子は，煮えたぎる攻撃性を深層にkeepし続けてきたのであろう。

おそらくほどよい（ good enough ）甘え・依存の在り方が，精神的健康な人格形成にとってきわめて重要であろうが，「ほどよさ」とは一体何か。筆者にとっては，難しい問題である。

(6) おわりに

セラピストとしてM子にかかわった筆者にとって，このplay therapyは，貴重な体験であった。client centered therapy のオリエンテーションをもちながら therapy をすすめていったが，Ⅰ期が最もしんどい時期であった。Ⅱ期頃より見通しがもて，Ⅲ期のM子の攻撃性に困惑したが，Ⅳ期以降の甘えがドミナントな時期に入るとセラピストである筆者は，時にはM子の恋人のような感覚におそわれたり，Ⅴ期でM子が犬になりきった時は，親犬になったり，下僕のようになったりした。Th自身，とても素直に，スムーズに遊び，M子にかかわることができたのは不思議なくらいである。M子が筆者の「甘えと攻撃性」を引き出してくれたような気もするのである。

最後にM子が小3の時，母親から筆者に送られてきた年賀状の一部を紹介して終りとしたい。「M子は，とても元気です。明るくなり，大きな声で発表できる様になりましたと担任の先生より，おほめの言葉をいただきました。昨年の秋には，おまつりでバトンのパレードに参加し，自信を得たようです。ぬいぐるみのナオ子ちゃんを持つのをやめ，今では大きなくまさんのお母さんです。洋服を着替えさせたり，やさしい言葉をかけています。そんなM子を暖かく見守っていきたいと思います。」

付記：本論文をまとめるにあたり，浅井忍さんが研修の目的でM子の play therapy を観察し（第9回より第29回まで），その観察記録も参考にしたので，ここに記して感謝いたします。

引用文献

荒木冨士夫　1979　小児期に発症する緘黙症の精神病理学的考察　児童精神医学とその近接領域 Vol. 20　No. 5

土居健郎　1971　「甘え」の構造　弘文堂

熊倉伸宏ら　1984　「甘え」理論の研究　星和書店

弘中正美　1983　緘黙症における萎縮した自我と肥大した自我　心理臨床学研究　Vo 1.1　No 1
畠瀬直子　1978　心因性緘黙症児のための心理治療仮説　児童精神医学とその近接領域　Vo 1.19　No 4
一谷彊ら　1973　場面緘黙症の研究（I）　—形成要因と心理機制について—　京都教育大学紀要　Ser. A. No 42
神野秀雄　1976　ある思春期登校拒否児の人格変化　—治療過程からの成因論の検討—　愛知教育大学研究報告　教育科学　第25輯
神野秀雄　1981　緘黙症の家族的背景　久世敏雄ら編　家族関係の心理　第6章　福村出版
Laybourne, Jr.P.C. 1979 Elective Mutism In Basic Handbook of Child Psychiatry Vol. 2 Ed. Noshpitz, J. D. Basic Books, New York
大井正己ら　1979　児童期の選択緘黙についての考察　精神神経学雑誌　Vol. 81　No 6
Winnincott, D.W. 1953 Transitional objects and transitional phenomena: A study of the first not me possession. International Journal of Psychoanalysis Vol. 34